

## 京都女子大学図書館所蔵連歌関係資料 翻刻と解題

### I

長谷川 千尋  
中前 正志

仏教文学会の大会または例会が京都女子大学で開催されるのに合わせて、過去に三度、京都女子大学図書館所蔵連歌関係図書特別展観を同大学錦華殿にて行ってきた（各回の展観目録および中前「京都女子大学図書館所蔵連歌関係図書特別展観 報告と補足」『仏教文学』第二十八号、平成16）参照。それらにて展観した図書のうち、広く全貌を紹介し本文を提供する必要のあると考えられるものについて、解題を付して翻刻することとしたい。

今回取り上げるのは四点で、『宗長作品集（連歌学書編）』（古典文庫、平成2）の重松裕巳氏解題の中で「いずれ全文の紹介がなされることと思う」として、「大要を付言するにとどめ」、太田武夫氏蔵本・神宮文庫蔵本との「主な異同箇所」のみが引載されたが、その後紹介されることのないままになっていた『連歌教訓歌』（911・2・Ki668）と、稀少な二条良基出座連歌の新出資料として展観時に特に注目を集めた『連歌百韻巻物素眼法師書』（911・2・貴639）、加えて、連歌総目録編纂会『連歌総目録』（明治書院、平成9）に記載のない新出百韻がいくつかある中から、『連歌屏風』（911・2・貴644）と『昌叱老連歌懐紙』（911・2）。前二者は長谷川、後二者は中前が、各々担当した。なお、本稿中の掲出書名は、所蔵者目録書名である。

（以上、文責・中前）

《凡例》 \*基本的に通行字体に改め、濁点を付した。また、必要に応じて句読点を施した。判読不能箇所は、□で示した。

\*作品ごとに、歌・句の頭に通し番号を付した。

\*百韻作品が各句二行書きにしているのを、一行書きに改めた。

\*『連歌教訓歌』の場合は、「(1才)」、百韻作品の場合は、「(初才)」などとして、改丁箇所などを示した。

### 連歌教訓歌 (911・2・Ki668)

#### 【翻刻】

あら玉の としたちかへる 朝がすみ ゆきかふ人の けしきまで 長閑にみゆる 野べごとに わかなつむ袖 しろたへの 雪まの草の 下もえに なびく柳の「(1才) あさみどり このめはるさめ ふるたびに 山のさくらは さきぬらん おぼろ月夜の 有明に かへるかりがね かきつらね 名残おほくも きこゆなり わさ田をかへす「(1ウ) さと人も めづらしげなる 春なれや 花のさかりの 都人 よし野のさとの おくふかき 岩のかけみち ふみならし春の夕べの 山でらの 入あひのかねに「(2才) 花ぞちる きしのやまぶき 藤なみの かきねもたはに 春くれてすみれつむ人 たれとなく 野をむつましみ 一夜ねて いつしか夏と けふは人 衣がへして「(2ウ) すぐしげに山ほとゝぎす いくさとも うの花がきね 夕月夜 花たちばなの かにゝほふ むかしおぼえぬ やどもなし 空かきくらし 五月雨の 雲はいづくも「(3才) ひまもなく 早苗とりうへ 声ぐくに かへるさとみな くれぬめり あや

めかりふく 家くゝの かやり火けぶる 門にいでゝ たちすぐむらし みな月の てる日のこずゑ「(3ウ) うつせみの  
うちしきりても 夕だちの すぎ行空の すぐしきは みそぎにすぐる 心ちして 秋にもなりぬ 萩のはの そよ  
めく音の うちなびく 門田のいな葉「(4オ) ほにいづる あしの丸屋の 秋の風 露ふきこぼす よるくゝの いなづ  
まかよふ うたゝねに もとあらの小萩 うつろひて ひとりある人 ながむらん たがたまくらも「(4ウ) 露けさの  
やゝはださむく なりゆけば つまどふ鹿の おきふしの 夜さむの月に 衣うつ きぬたのひゞき 草むらの むしの  
こゑぐゝこのごろの めざめせらるゝ「(5オ) ながき夜の はつ霜まよふ あさなく 野山いろづき はつかりの  
なきわたりつゝ 長月も 神無月とて けさよりは しぐるゝ空の さだめなく あられみだれて「(5ウ) 霜しろく  
すみやくけぶり 山ふかみ たちのぼりつゝ 里とをみ みねのしら雪 いたづらに つもりくゝて ことしさへ ほど  
もなくぞ くれはつる つれなき人を「(6オ) 待とせし やどはあれつゝ 庭のおもは よもぎがすゑの 道とちて  
うらむる暮も 玉のをよ たえなばたえね とばかりに あひ見て後は 中くゝに むかしは物を「(6ウ) 思ひきや  
恋しゆかしの 文のみ かよふ事とて はかなしや うちぬるよひの かずくゝに まくらのちりの つもるをも は  
らひだにせぬ ひとりねの いくあかつきの「(7オ) 鳥のねを まつ事にして あけぬらん たびねの人は おきわか  
れ 山路の雲や 野べの露 あら磯浪の とまりして まほひく舟の けふもまた 行衛もしらぬ「(7ウ) まゆのごと  
みゆる雲井を するべにて 何にたとへん 世の中は こぎ行舟の あとなれや もしほのけぶり いさり火の あまの  
たくなは うちはへて つりする舟の「(8オ) 行かへる よそめもくるし 山里は 物のさびしき 事こそあれ 世の  
うきよりの 言の葉に ながさめつゝも 月日へぬ 身はかくすとも あさ夕に 君をば千世の「(8ウ) いのりして  
ときはかきはの よろづ世に 久しかるべき 住よしの松

誹諧廿首

- 1 百千鳥又よぶこ鳥なく雉子うぐひすのほかは作者にぞよる」(9才)
- 2 花ぐもりおぼろ夜の月朧月おぼろ月夜はしく物ぞなき
- 3 忍び文猶かよひ文中のふみわが中思ふ中はうるさし
- 4 忍び妻しのびぢ又はかよひぢようかれめことに打ひらめ也」(9ウ)
- 5 なかだちよ二みちかくるあだ心あだなあだ人うきなうき人
- 6 恋衣うき恋心うき思ひみな人常にうき思ひぞよ
- 7 うき契り又うき心うさつらさまたあぢきなや恋しかなしよ」(10才)
- 8 うつり香は袖かまくらか衣とも何ゆへとなきかこそしられね
- 9 山嵐山雲又はやま窓やこれらはきらふ事ならねども
- 10 水音や水田谷水秋雨や霧さめことに春雨にゝず」(10ウ)
- 11 萩の風鹿のとをづま小田守やしづがつくり田なるこなくとも
- 12 柴かりや草かりめかり塩くみや又しほぐもり浦のみちしほ
- 13 ひとり舟ひとりの村や江のむらや又は出舟あまのすて舟」(11才)
- 14 たく火かげきつね火又は螢火や暮がたくれつかたは無下ぞや
- 15 都路よかりふし又は旅やつれこれらは句がらつゞけがらにや
- 16 里の子や又あまのこや牛のこやおさあひためはことさらにいや」(11ウ)
- 17 月の名のむ月二月やよ弥生は月文月もつけにくのなや

18 いふべくは五月みな月長月や神無月猶名さへさびしや

19 しづのめが五月のうへ田苗代草はつほとゞぎすいやは初文字」(12オ)

20 ともしがり猶ねらひがり初鳥狩これらは今の作者秀逸

21 句のはてのからもらし又は道のべよさてはさびしもさてはいさめや」(12ウ)

寅王どのへ書てまいり候案にて候。此等は常に毎度ある事にて候おぼゆる次第任筆已。此等を嫌ふにあらず。きはは、今程之連哥あるべからず候。しかはあれど、おなじくはかやうの心得もがなと思ふ心を書付侍る也。前の長哥のやうに」(13オ) いひつゞけ候は、連哥の会席座ごとむかはれんおりふしは四季恋雜の心もち、かやうにてや風情も幽玄なるもよろしきも心にうかびもすべきと只をしはかりの事にて候。但是は何とかなど思ふ人の自然之ためにて候。正五九月法樂連哥の」(13ウ) ためばかりは何のかひもあるべからず候。火に入られ候べく候。」(14オ)

此一冊、片時に御うつし候本、余に希有におぼえ候てとりかへまいり候。返ゞ只今御立寄、まことにくうつゝとも候はぬ山の名におひ候草庵にてこそとへ、猶もつれなくなからへ候て、又ことづてをだに」(14ウ) 待入まいり候。かしく。

堅桃まいる

八十三  
宗長」(15オ)

### 【解題】

本書は、初心者向けの連歌の知識を、覚えやすい七五調の歌に詠み込んだ、宗長の著作『長歌・俳諧歌』の一伝本である。古典文庫『宗長作品集〈連歌学書編〉』に、重松裕巳氏によって、太田武夫氏蔵本と神宮文庫蔵本が翻刻されているが、本書は、跋文その他において、それらを補うところがある。『長歌・俳諧歌』は、重松氏の命名によるその書名の通

り、「長歌」と「俳諧二十首」（以下「俳諧歌」と呼ぶ）から成る。「長歌」は、連歌に用いるのにふさわしい言葉を四季、恋、雑の順に並べて一九七句の長歌に仕立てたもの。「俳諧歌」は、連歌に好まない言葉を短歌二十一首で示したものである。伝本は、以下の通り、「長歌」「俳諧歌」の両方を備えたものと、いずれか一方のみのものがある。

○「長歌」「俳諧歌」を備える伝本

①京都女子大学蔵本（京女本）

袋綴一冊。縦二〇・一糎、横一三・六糎。縹色表紙の左肩に「堅桃まいる 宗長」と墨書する。料紙は楮紙。内題はないが、後半には「俳諧廿首」の見出しがある。每半葉六行。卷末に「寅王どのへ書てまいり候」以下の自跋、さらに「堅桃」に宛てた「此一冊、片時に」以下の自跋がある（翻刻参照）。墨付十五丁（遊紙なし）。第十五丁のノドに「長海」の朱長方印。近世初期写。包紙に「●印／御哥書 一冊／宗長之奥書有。虫喰有」とある。虫喰は本文の判読に差し支えない程度のものであり、現在は補修されている。

②太田武夫氏蔵本（太田本）

袋綴一冊。縦一三・八糎、横一一・〇糎。題簽「長歌」。「長歌」「俳諧二十首」を収める。卷末に「此等每座ある詞どもにて候おぼゆる次第任筆訖。これら嫌ふにはあらず。嫌はゞ今ほどの連歌□□れまじく候。可随所存□□ども、おなじくは如此分□□まほしく候て、書付侍る□□し。前の長歌の様に□□け候はゞ又、每座句にうち□□かはれ候はんずる四季恋雑□□前句にこと心あるまじく候□□其言説にいひつゞけ候□□ほしくつたなき心詞は□□るべからず。稽古のためは第一にて候べく候。／寅王殿参 宗長在判」とある。さらに「享禄三唐寅寅歳卯月日」「此一冊卯月廿二日書之、可有落字等者也、比興々／天文廿四年（花押）記之」の識語がある。『宗長作品集（連歌学書編）』に

翻刻がある。

○「長歌」のみの伝本

③天理図書館綿屋文庫蔵本『連歌去嫌歌』れ1・1―23（天理本）

「柴屋軒宗長真跡連歌去嫌除嫌歌」に付載される。表題は「宗長連歌百韻行様長歌述作」。

○「俳諧歌」のみの伝本

④宮内庁書陵部蔵本『比況集』266―303（書陵部本）

横本袋綴一冊。表紙左肩に「比況集 宗長作」と墨書する。「俳諧歌」は、「比況集」「古連歌并付合心持仕様等嫌詞等」

に続いて「俳諧廿首」と題して合綴されている。（その後に「禁詞集」「遊佐宗祇問答」「肖柏伝書」を合綴）。「右、宗長、今川の寅王殿への俳諧廿首也、長歌の詞も別に在之」の識語がある。

⑤屏山文庫蔵本『連歌三部集』（屏山本）

横本列帖装一帖。題簽「連歌三部書」。「連歌三部書」の巻末に「此廿首ハ宗長毎度嫌はれしを」として合綴する。

⑥神宮文庫蔵本『連歌集』3―3759（神宮本）

『連歌集』のうちに「四季恋雜句躰次第長歌」として合綴する。巻末に「此等類、不可有異論候。自然おぼゆる次第、いひつらね候事にて候。連がはさしあひ嫌物のみにて嫌すつき詞もおほかるまじく候。作者用捨肝要候。あふしみかきとくもむあなどの作者候。皆初心の人のためにて候。比興々々。一笑々々。／宗長之」とある。『宗長作品集（連歌学書編）』に翻刻がある。

本作品の原態が、京女本や太田本のように「長歌」と「俳諧歌」を合綴した形であることは、宗長自跋に「前の長哥の

やうにいひつゞけ候は」(京女本)とあることから明らかである。また、「俳諧歌」単独の伝本である書陵部本と神宮本に、各々「長歌の詞も別に在之」、「四季恋雜句牀次第長歌」とあるのは、その名残である。

伝本系統についてみると、太田本は、自跋の末尾に「寅王殿参 宗長在判」とあり、寅王に贈った清書本の系統であることがわかる。天理本、書陵部本、屏山本には自跋が無いが、後述する本文異同の様態と、書陵部本の識語(今川の寅王殿への俳諧廿首)とを勘案すると、この二本も清書本の系統に属すると見てよからう。

これらに対して、京女本は、自跋の最初に「寅王どのへ書てまいり候案にて候」とあることから、草稿本の系統と見なされる。草稿本と言っても、本文内容には著しい相違は認められないのだが、跋文はその例外であり、特に「長歌」について触れた部分は、次のように大きく異なっている。太田本は欠字が多く十分に意を取りがたいが、京女本に比して簡略な内容になっている。

#### 〔京女本〕

前の長哥のやうにいひつゞけ候は、連哥の会席座ごとにむかはれんおりふしは四季恋雜の心もち、かやうにてや風情も幽玄なるもよろしきも心にうかびもすべきと只をしはかりの事にて候。但是は何とかなど思ふ人の自然之ためにて候。正五九月法樂連哥のためばかりは何のかひもあるべからず候。火に入られ候べく候。

#### 〔太田本〕

前の長歌のやうにいひつゞけ候は、又、毎座句のうち（むか）かはれ候はんずる四季恋雜（むか）前句にこと心あるまじく候（むか）其言説にいひつゞけ候（むか）ほしくつたなき心詞は（むか）るべからず。稽古のためは第一にて候べく候。

一方、神宮本は、寅王宛の跋文とは異なる宗長の跋文を有する上に、本文も改変されており、全くの別系統に属する。この点については、後にやや詳しく見ることにしたい。

ところで、京女本には、先程の自跋に続いて、尾張国の連歌好士である賢桃（堅桃）に宛てた書簡体の跋文が備わる。此一冊、片時に御うつし候本、余に希有におぼえ候て、とりかへまいり候。返ゞ只今御立寄、まことにくうつゝとも候はぬ山の名におひ候草庵にてこそとへ、猶もつれなくながらへ候て、又ことづてをだに待入まいり候。かしく。

堅桃まいる

八十三  
宗長

これによると、宗長八十三歳の享禄三年（一五三〇）に、賢桃が、駿河国宇津山の麓にあつた宗長の柴屋軒を訪れた。その折に賢桃が携えていた『長歌・俳諧歌』の写本があまりに粗悪な本文であつたため、手元に留めていた草稿本（の写本）と取り替えてやったという経緯のようである。享禄三年と言えは『宗長日記』が残っている年だが、賢桃来訪のことは記されていない。『宗長日記』は、日記といつても、月に一度程度の断続的なものであるため、賢桃来訪の記録が残っていないのは無理からぬことであり、そのことによつて、右の跋文の信憑性が揺らぐわけではない。

『長歌・俳諧歌』の成立は、太田本により享禄三年とされているが、太田本の「享禄三唐寅歳卯月日」の日付は、寅王宛名と宗長署名の後ろにあることから、必ずしも成立の時点を指すとは言えず、成立後に書写者が書き入れた日付である可能性も捨てきれない。京女本の右の跋文からも、享禄三年にはいくらか広まっていた様子が窺えるので、享禄三年四月以前の成立と考えておきたい。

寅王については、書陵部本に「今川の寅王殿」とある。米原正義氏は、駿河今川氏一門の瀬名氏であるとし、宮内庁書陵部蔵『今川為和集』の享禄五年五月十八日条に「瀬名寅王丸法楽に」とあるのを紹介されている<sup>4</sup>。また、今川氏家臣団の研究からは、瀬名貞綱が幼名を虎王丸と称したこと、生没年は未詳ながら、記録類には大永年間（一五二一〜二七）の竜泉寺文書以下、『言継卿記』弘治三年（一五五七）条までに見えることが明らかにされており、寅王が、幼少の瀬名貞綱であることはほぼ間違いないように思われる。宗長は、享禄三年三月二日に、「虎王丸」の発句「浅みどり露にみだるゝ柳

哉」(宗長の代作)で『白何百韻』を独吟している。<sup>6)</sup> 寅王との関係については、それ以上のことはわかっていない。

次に、「長歌」「俳諧歌」の各々の内容と本文の問題について述べておく。

「長歌」は、四季、恋、雑の句に詠むべき趣きを挙げ連ねて初心者に示したものだが、同様の書物に、宗長作と言われる『幼童抄』(永青文庫蔵)がある。その跋文には「幼童のため」とあり、また「毎座四季恋雑の句あらば、心を此一冊にうつして案ぜられ侍らば、何となく無下なる句は出侍らじ」ともあり、執筆のねらいは「長歌」と全く変わらない。冒頭部分を挙げておく。

とし立かへるあしたの空、いつしかと人の心のどやかに、はつねまたるゝ鶯、山のはほのがすき、残れる雪所ぐになり、谷の氷とけいづる、雪げの沢水、：

ただ、『幼童抄』は、部立別に散文体で記述し、例歌を挙げるなどした論書の形式をとっているため、単純に「長歌」と比較することはできない。勿論、内容は自ずと重なるところもあるが、類似する表現となると却って見つからない。

「長歌」の伝本には、先掲の通り、京女本、太田本、天理本の三本がある。太田本と天理本の本文は概ね等しく(太田本にはやや欠字が多い)、京女本には次の三箇所独自の本文がある。これについて簡単に検討を加えておく。

	太田本・天理本	京女本
(1)炭やくけぶり	さととをみ	すみやくけぶり 山ふかみ たちのぼりつゝ 里とをみ
(2)岸の藤なみ 款冬の 垣ねもたはに		きしのやまぶき 藤なみの かきねもたはに
(3)よゐくの いな妻		よるくの いなづま

(1)は、太田本と天理本の脱落と考えられる。(2)に関しては、和歌には「岸の藤波」「岸の山吹」ともに詠まれているが、同じことなら「岸」と「波」の縁語をきかせる「岸の藤波」の方が、ここにはふさわしかろう。他方、後続の「垣根もたはに」との親密度が高いのは「山吹」の方であり、「しめゆひし籬やたわに成ぬらん花おもげなる庭の山吹」(宝治百首・六九四・資季)のような歌もある。従って、太田本、天理本の「岸の藤なみ 款冬の 垣ねもたはに」が原形であり、京女本は語順を誤ったものと判断される。(3)については、「宵の稲妻」の方が歌語として一般的であるから、太田本、天理本の「よる(ひ)く」が原形であった可能性が高い。

「俳諧歌」の二十一首は、自跋によれば、連歌の会席で毎座のように耳にする言葉を集めたもので、これらの言葉を「きはぎ」今の連歌は成り立たないから、「嫌ふ」わけではないが、「おなじくはかやうの心得もがなと思ふ心」を書き付けたものであるという。すなわち、「嫌詞」や「用捨の詞」などと呼ばれる、連歌に好まざる言葉、使用に一定の注意を要する言葉を集めたもので、二十一首の歌の中に、そうした語が八十一語含まれている。

このうちの四十九語は、宗長の著作『宗長嫌詞』<sup>8)</sup>に収録される語と共通し、全体の六割に及んでいる。一、二の例を挙げれば、次のようである。

忍び文猶かよひ文中のふみわが中思ふ中はうるさし

(俳諧歌・第三首)

一、忍文 中のふみ 通文 よろしからず候。源じにも文かよはしなどゝ書て候。

一、うき中 わが中 思ふ中など不宜候。毎度打ひらめに聞え候ものにて候。

(宗長嫌詞)

うつり香は袖かまくらか衣とも何ゆへとなきかこそしられね

(俳諧歌・第八首)

一、移香 袖とも枕とも（衣とも）なくは悪候。

（宗長嫌詞）

一方、『宗長嫌詞』には見えない「朧月」「あだ心」「あだな」「あだ人」「うき人」「うき恋心」「うさつらさ」「あぢきなや」「秋雨」「鹿のとをつま」「みちしほ」「出舟」「しづのめ」「早苗草」「道のべ」の十五語も、『連歌諸抄』『薄花桜』『肖柏口伝之抜書』といった、嫌詞を集めた書物のいづれかに確認することができる。

また、「百千鳥」「よぶこ鳥」「かよひぢ」「うきな」「恋しかなし」「なるこ」「めかり」「かりふし」「里の子」「あまのこ」「牛のこ」「む月」「は月」「文月」「初鳥狩」「句のはてのかも」「らし」の十七語も、他出は確認できないが、注意すべき言葉として挙げていると考えられる。例えば、

里の子や又あまのこや牛のこやおさあひ神宮本「おさあひ人の句にはいやいや」ためはことさら神宮本「おさあひ人の句にはいやいや」にいや（第十六首）

の一首は、幼い人が、自分も子供なのに「里の子」や「あまのこ」などと詠むのはその身にふさわしくないと注意したものである。宗長は『五十七ヶ条』（『中世の文学 連歌論集』四、三弥井書店）で「一句の仕立、人による」ことの例として、二条良基の「侘人は青田をかるにしろからん」の句を挙げ、「撰家御覧有まじきことなればくるしからず。朝夕見る人の、かやうの句申されたらんは、いやしく似合まじき也。（中略）惣じて、人の位、分際によりて句を仕立つる也」と述べており、『宗長嫌詞』（平松本）にも「老て」の語に対して「わかき人などの句に可有分別候」と注している。第十六首は、相手が幼い寅王であるからこそその一首であろう。

「俳諧歌」の伝本には、京女本、太田本、書陵部本、屏山本、神宮本の五本がある。このうち、京女本、太田本、書陵部本、屏山本の間には、目立った異同は生じていない。ここでは、嫌詞に関わる異同について述べておく。

(1)京女本「恋衣うき恋心うき思ひみな人常にうき思ひぞよ」（第六首）の傍点部分は、上の語と重複しており、他本の「うき涙」が正しい。

- (2)書陵部本と屏山本が、右の歌の「うき恋心」を「うき恋衣」とするのは、上の語と重複し、誤りである。
- (3)太田本が「都路よかりふし又は旅やつれ」(第十五首)の傍線部を「かり枕」とする。
- (4)京女本「しづのめが五月のうへ田苗代草」の傍点部分は字余りになるので、他本の「早苗草」が正しい。

文意に関わらない語句の異同の詳細は省略するが、京女本の「これらは今の」(第二十首)は、「これら殊更」(太田本)、「これらも今程」(書陵部本)、「これらはまほに」(屏山本)と揺れている。

神宮本については、寅王宛のものとは異なる跋文を有し、別系統に属すると見られることは既に述べた。本文異同の様相からすると、寅王宛の述作を改変したのが神宮本であると考えられる。

神宮本の顕著な特徴は、次に示すAの三首が無く、代わりにBの三首が加わっているところにある。

A いふべくは五月みな月長月や神無月猶名さへさびしや(第十八首)

しづのめが五月のうへ田苗代草はつほとぎすいやは初文字(第十九首)

ともしがり猶ねらひがり初鳥狩これらは今の作者秀逸(第二十首)

B 立うかれ又まちうかれ打ながめうかれめことにゆかしげもなし(第五首の次)

谷のはや雲のは又は袖のへや床のへ常にみみにふれ□(第十三首の次)

村がすみ又うすがすみあさけぶりさくら木などはよせなくてやは(第十五首の次)

Aに挙げた第十八首は、嫌うべき月の名を挙げた第十七首との対で、好むべき月の名を挙げたものである。全体を、嫌詞を示すという方針で統一するならば不要となるはずの一首である。また、傍線を付したのは、『宗長嫌詞』に収録される語句であるが、Aに四語、Bに九語が含まれ、神宮本が『宗長嫌詞』に近づいていることがわかる。AとBの歌の差し替えは、より多くの嫌詞を盛り込み、なるべく出現頻度の高いものを挙げたいという意図による改変であるように思われる。

さらに、神宮本の異同には、本文を整えようとする意識も窺える。例えば、第四首に「忍び妻しのびぢ又はかよひぢよ  
うかれめことに打ひらめ也」とあるが、神宮本は、「うかれめ」の語を、先掲Bの「立うかれ」歌に組み入れ、Bのこの一  
首を「うかれ」の付く言葉でまとめている。そして、第四首の傍点部分を「又みちのべといひはてずとも」として、「かよ  
ひぢ」から「道のべ」へと続けている。但し、「道のべ」は第二十一首と重複している。宗長の見落としてであろうか。

また、次の二首、

・水音や水田谷水秋雨や霧さめことに春雨にくずず (第十首)

↓ 水音や谷水水田小田守やしづがつくり田遠田守こゑ (神宮本)

・荻の風鹿のとをつま小田守やしづがつくり田なるこなくとも (第十一首)

↓ 荻の風しかの遠つまきりさめや又あきさめも春雨に似ず (神宮本)

後半部分を矢印以下のように入れ替えて、本文も少し変えているのは、それぞれを田に関する言葉、秋の言葉で統一する  
ためである。

以上の他に、神宮本の改変と思われる箇所を挙げておく。

・うぐひすのほかは作者にぞよる (第一首) ↓ 鶯のなは作によるべし

・みな人常にうき思(原)ひ原ひ原ぞよ (第六首) ↓ うきなみだこそ猶うるさけれ

・何ゆへとなきかこそしられね (第八首) ↓ なにのよせなき香はかゞずとも

・あさあひためはことさらにいや (第十六首) ↓ おさあひ人の句にはいやく

・は月文月もつけにくのなや (第十七首) ↓ これらはことにつけにくくそろ

注

- (1) 未見。書誌等は、古典文庫『宗長作品集（連歌学書編）』の重松氏の解説に拠る。『古典籍展観大入札会目録』（平成十三年十一月）八十六頁に「宗長長歌」の書名で奥書部分の写真が掲載されている。
- (2) 賢桃の経歴については余語敏男『宗碩と地方連歌』（笠間書院、平成5）参照。
- (3) 古典文庫『宗長作品集（連歌学書編）』解説。
- (4) 『戦国武士と文芸の研究』八五三頁（桜楓社、昭和51）。
- (5) 『駿河の今川氏』第二集（今川氏研究会編、静岡谷島屋、昭和52）。
- (6) 『連歌百韻集』（汲古書院、昭和50）に静嘉堂文庫蔵連歌集書本の影印を収める。年次は、同書の伊地知鐵男氏による「解題」に従ったもので、高野山正智院本に拠るといふ。
- (7) 『連歌貴重文献集成』第十集（勉誠社、昭和57）の影印に拠る。また、『西日本国語国文学会翻刻叢書』第一期・第四に翻刻がある。
- (8) 今回、参照した『宗長嫌詞』の伝本（宮内庁書陵部蔵桂宮本、同別本、国立国会図書館蔵本、早稲田大学蔵本、京都大学蔵附属図書館平松文庫蔵本、同谷村文庫蔵本、陽明文庫蔵本、天理図書館綿屋文庫蔵本、島原図書館松平文庫蔵本）間の異同を最大限取り入れた。本文の引用は、特に断らない限り、国立国会図書館蔵本に拠る。
- (9) 拙稿「禁詞考」（『京都大学国文学論叢』6、平成13）
- (10) 『宗長嫌詞』には「苔のは」とある。「谷のは」「苔のは」の誤写と見なした。

（長谷川）

賦何路連歌

- 1 朝露の水よりむすぶ木陰哉
- 2 池浪さても松の秋かぜ
- 3 月いづる山の姿のあらはれて
- 4 野を通路と鹿やなくらん
- 5 まよふとも旅にはやどの有べきに
- 6 其方の雲の遠ふるさと
- 7 さえくらす時雨や雪に成ぬらん
- 8 陰の落葉ぞ霜をかさぬる
- 9 菊のこる山路の草の冬がれて
- 10 のめばや酒の葉なるらん
- 11 みし夢も覚ての後おぼえぬに
- 12 こゝろぞ猶もむかしなりける
- 13 なき人の又もかへらぬ別にて
- 14 花と水とのあはれ世の中

救濟 崇誉 英□ 導興 円恵 道明 □阿(初オ) 能阿 忠頼朝臣 宗春 家尹朝臣 親春朝臣 救

- 15 雲となる夕斗やかすむらん
- 16 雨しづかなる春の山ざと
- 17 したぎえの雪ふる寺の道みえて
- 18 かげは夜ぶかき法のともし火
- 19 我にうき心や秋をそむくらん
- 20 うらみの風のくずは吹音
- 21 書文に涙の露の玉まきて
- 22 簾のひまは夕暮の月
- 23 葦垣のこやの浦船出ぬるに
- 24 難はのかねののこる春の夜
- 25 梅かほるあらしの枕歛て
- 26 ちらでも花や夢となるらん
- 27 あだし身と思へば我もたのまぬに
- 28 きのふになればけふのいにしへ
- 29 心にはしらでもはやく老の来て

英 救 良 崇 家 能阿(初ウ) 導 円 救 忠 導 明

- 30 おなじ秋ともうきにおぼえず  
救
- 31 萩そよぐ風の隣の主は誰  
救
- 32 花ちりわくる萩の中がき  
良
- 33 野を過る風にへだてはなき物を  
崇
- 34 しぐれ又降山のした露  
英
- 35 すてし身の心ながらに袖ぬれて  
明「(二オ)
- 36 命の程や世をなげくらん  
救
- 37 なきぬらす蟬のもぬけの唐衣  
導
- 38 雲をりはへて風ぞすゞしき  
能阿
- 39 扇にや影みぬ月をいだすらん  
明
- 40 夢なきねやぞたゞ涙なる  
救
- 41 我ごとく姫鳥のよる鳴て  
円
- 42 うかれごゝろの誰を待覧  
英
- 43 旅衣妻をさだめぬ宿ごとに  
良
- 44 雲にこもれり跡の遠山  
救
- 45 暮ぬるか月三輪がさき泊瀬河  
崇
- 46 紅葉や浪の龍田なるらん  
救
- 47 たをやめの袖の錦の色みえて  
英
- 48 かへりてすむは古郷の春  
円
- 49 我をしむ別になくか天津雁  
明
- 50 うきかざくぞ□うつゝなる  
忠「(二ウ)
- 51 ゆく水の苔に成てはをともし  
良
- 52 うへは雪ふる浪の埋木  
救
- 53 ながれても月こそ瀬ゝの氷なれ  
良
- 54 谷までわたす雲の梯  
導
- 55 身には猶迷家を出かねて  
能阿
- 56 おやにはなれぬ人の思子  
救
- 57 智のあらば庭訓もしりぬべし  
明
- 58 たつことなかれ花の木下  
崇
- 59 柚山はさくらばかりやのこるらん  
成豊
- 60 春にひくこそ心なりけれ  
救
- 61 月かすむ横雲ながら夜の明て  
明
- 62 鳥は別をなどいそぐらん  
救
- 63 なけばとて人は名残をおもはぬに  
円「(三オ)
- 64 後の契はおなじ世の中  
英
- 65 恋しなば生あはむもいさしらず

66 淀河ちかくはなついろくづ 救  
 67 祭するけふは来にけり八幡山 明  
 68 朝の人もゆふぐれはなし  
 69 交りの市のなかくしづかにて 救  
 70 塵の世ならばすみもかへばや 能阿  
 71 木葉吹風にぞ月に成としれ  
 72 夜はしづまりぬ近笛の音 良  
 73 夢までもちちくと人を待物を 救  
 74 とはずは我や行てうらみん 英  
 75 うきにこそ心の秋はしられけれ 宗  
 76 なみだはしめば露もぬらさず 円  
 77 玉章を置所なくおもふ身に 崇  
 78 とくればなをやうれしからまし 「(三ウ)  
 79 折に散花をば袖につまばや 救  
 80 都の春の旅の家裏 導  
 81 夕塩のみつの小嶋やかすむらん  
 82 風もとある浪の浜河 家  
 83 かずくのまさごの千鳥跡みせて 救

84 いにしへ文は読もつくさず  
 85 人ごとの心の種の大和哥 能阿  
 86 花色ゝにかはるなでしこ 明  
 87 五月しる袖の葉玉けふかけて 導  
 88 ふる巢はいづく山ほとゝぎす 救  
 89 空くもる雨一声やきこゆらん 英  
 90 西をはじめの秋の朝風 良  
 91 枝分に花みし梅の紅葉して 救  
 92 影もや月のかつらなるらん 能阿「(名才)  
 93 ふけぬとて神楽男のうたふ夜に 明  
 94 名は石清水山あひの道 崇  
 95 ぬしや誰こほりにきれるをみ衣  
 96 日かげのいとゞのどかなる春 家  
 97 音までも柳によはき風吹て 導  
 98 さくら木だかく盛なる比 英  
 99 明ぬるか雲よりうへの八重がすみ 救  
 100 天の戸までもひらく此御代 導

御十七 忠頼朝臣 三

家尹朝臣 四

救済十九 親春朝臣 一

<sup>山内</sup>崇誉 七 宗春 二

<sup>待子</sup>英救 八 良阿 七

<sup>教智</sup>導興 九 成豊 一

円恵 六 能阿 七

道明 九 「(名ウ)

【解題】

本書は、二条良基、救済等が出座する『年次未詳何路百韻』（発句「朝露の水よりむすぶ木陰哉」）の連歌懐紙である。これまでに未紹介の作品であり、伝本も他に知られていない。まず、書誌について記しておく。

卷子本一軸。箱入。箱書「連歌百韻巻物素眼法師書」。山吹地疋繫ぎ模様表紙、縦一八・八糎、横二二・二糎。外題は「素眼法師書」と直書きする。見返は金箔に銀砂子撒き。本文料紙は表紫裏藍の打曇の楮紙。連歌懐紙を卷子本に仕立て直したものである。紙高一五・三糎。各紙の長さは五一・二糎〜五二・〇糎であるが、第一紙と第八紙のみ、それぞれ三八・〇糎、四九・二糎と短い。特に第一紙は「賦何路連歌」から始まっており、興行年月日が記されるべき部分と余白が裁ち切られている。また、全紙を通じて二〜六行おきに切断された跡があり、一旦はばらばらにされたものが、再び継ぎ合わされたようである。継ぎ目の打曇の模様が合うため、錯簡は生じていないと見られる。軸巻紙に「素眼法師真跡也／古筆了仲（花押）」と墨書する。古筆分家十三代了仲（一八二〇〜一八九一）か。また別に、寛政三年（一七九一）四月の大倉汲水の極札「素眼法師朝露の（印）」（表）「連歌百韻巻物<sup>辛</sup>（印）」（裏）が付随する。伝承筆者の素眼は、救済門の連歌師（『ささめい』）。四条道場金蓮寺の僧で、素眼流の祖とされる能書家である。

書写時代は南北朝時代から室町時代前期と推量される。

本百韻の連衆と句数を、句上に従って挙げれば次のようになる。

御十七、救済十九、山内崇誉七、侍子英救八、鞍智導興九、円惠六、道明九、忠頼朝臣三、家尹朝臣四、親春朝臣一、宗春二、良阿七、成豊一、能阿七

「御」は、連衆の顔ぶれから二条良基と推定される。良基の句はすべて作者名無記である。

良基時代の連歌作品は伝存する数が少ないが、その中でも、本百韻のように良基と救済が同座した作品で、なおかつ百韻が完備したものとすると、文和四年（一二五五）の『文和千句』（第一百韻から第五百韻までが現存）が唯一である。ここでは、両者の句数は同数か良基が多いかのいずれかだが、本百韻では、良基が十七句、救済が十九句と救済の方が二句も上回っている。従って、本百韻は、文和四年以前、良基がまだ救済の指導下にあつた頃の成立である可能性がある。『菟玖波集』詞書によれば、良基は、関白内大臣であつた暦応三年（一二四〇）から康永二年（一二三二）の間に、自邸で千句連歌を張行しており、救済も参加している。良基は元応二年（一二三〇）の生まれであるから、二十代の初めには既に救済と交渉を持っていたのである。本百韻の成立がいつ頃まで遡るのかについては明らかにしえないが、仮に『文和千句』以前の作とすれば、良基ないし救済が出座する連歌作品としては、現存最古のものということになる。

連衆について一瞥しておく、句上に「山内」の注記のある崇誉は、『太平記』に「山内判官」と見える、佐々木山内氏の祖、信詮（法名、崇誉）である。永和三年（一二七七）没（花宮三代記）。「鞍智」の注記のある道興は、佐々木鞍智氏時満。『一万首作者』に「佐々木四郎左衛門入道」として名を連らね、『延文五年十一月十三日何船百韻』に出座する。英救は、『九州問答』に「侍公見存ノ程ハ、英救ナンド扶持ハ別段ノ事也」と見える人物であろう。救済（侍公）が扶持していたという英救は、その名に救済の名前の一字を受け継いでいること、本百韻の句上に「侍子」と注記されていることか

ら、救済の養子ではなからうかと推測する。円恵、道明は『紫野千句』に出座。家尹朝臣と忠頼朝臣は、良基の側近で、貞治五年（一一三六）の『年中行事歌合』等、良基主催の歌会に出席している<sup>3</sup>。家尹は、月輪中将、『新続古今集』『菟玖波集』入集、『文和千句』『延文五年十一月十三日何船百韻』出座、嘉慶元年（一一三八七）没。忠頼は、鷹司、『石山百韻』に出座。また、成豊は、祝部、『新後拾遺集』入集。良阿は善阿門連歌師の良阿かと思われ、能阿ともども『菟玖波集』に入集している。

最後に、本百韻の式目の運用で注意されるのは、春、秋の句の最低連続句数に関してである。春、秋の句が出たら最低でも三句は続けるという規定は、文龜元年（一一五〇）の肖柏による式目の増補改訂において初めて明文化されるのだが、勢田勝郭氏の調査によれば、そのような意識は良基の時代に既に芽生えていたらしい。春、秋の句が二句以下で捨てられた例は、『文和千句』では百韻につき一〜四例、平均すると二・二例の割合で現れるが、その後、減少の傾向を見せ、至徳二年（一一三五）の『石山百韻』では全く見られないという<sup>4</sup>。

本百韻では、次の三箇所、春、秋の句を二句で捨てた例が見られる。

- |                  |   |
|------------------|---|
| 44 雲にこもれり跡の遠山    | 雑 |
| 45 暮ぬるか月三輪がさき泊瀬河 | 秋 |
| 46 紅葉や浪の龍田なるらん   | 秋 |
| 47 たをやめの袖の錦の色みえて | 雑 |
| 48 かへりてすむは古郷の春   | 春 |
| 49 我をしむ別になくか天津雁  | 春 |
| 50 うきかずくぞ□うつゝなる  | 雑 |

74 とはずは我や行てうらみん 雑  
 75 うきにこそ心の秋はしられけれ 秋  
 76 なみだはしめば露もぬらさず 秋  
 77 玉章を置所なくおもふ身に 雑

このような点からも、本百韻が、現存する良基時代の作品の中でも比較的古いものであることが窺われる。

注

- (1) 井上宗雄『中世歌壇史の研究 南北朝期』(改訂新版、明治書院、昭和62)。
- (2) 竹島一希氏のご教示に拠る。
- (3) 注(1)書。
- (4) 『連歌の新研究 論考編』第四節「春・秋の句、三句以上連続の制約化の時期」(おうふう、平成4)。

(長谷川)

連歌屏風(911・2・貴644)

【翻刻】

天文廿三年卯月二日

賦何人連歌

- |                     |         |                     |         |
|---------------------|---------|---------------------|---------|
| 1 風や花ふけば散くる夏木立      | 宗 粮     | 14 春にとはるゝ露の古跡       | 恕 哲     |
| 2 むら雨さそふ山ほとゝぎす      | 歳 長     | 15 たれわけて雪まのみちのかすむらむ | 元 理     |
| 3 夕浪のとまりにちかき舟みえて    | 恕 哲     | 16 おきゆく山はまだき明がた     | 底 閑     |
| 4 里は入江のかねさやかなり      | 紹 巴     | 17 おもかげは宮古の月にさきたちて  | 玄 哉     |
| 5 もしほ焼煙や月に更ぬらん      | 底 閑     | 18 夢まちあへぬ袖のあき風      | 承 知     |
| 6 秋さむき夜ぞ袖におぼゆる      | 元 理     | 19 わかれての又寝身にしむ朝床に   | 宗 粮     |
| 7 おぎの葉にかたらひあかぬはし居して | 承 知     | 20 なみだぞかたみいかにらはむ    | 玄 札     |
| 8 虫のなくねもほのかなるころ     | 玄 哉〔初才〕 | 21 うき時のうきもよしやとなくさめて | 恕 哲     |
| 9 霜まよふすそのゝかたへのこる日に  | 玄 札     | 22 浅茆がおくや世のほかのみち    | 紹 巴〔初ウ〕 |
| 10 かへるさをくる山かぜのすゑ    | 一 千 代   | 23 さくら咲春さへ暮ぬたれかこむ   | 底 閑     |
| 11 瀧つ波みなかみとをく声落て    | 歳 長     | 24 ともなふ蝶のあはれしられき    | 歳 長     |
| 12 かつはとけてもこほる岩がね    | 宗 粮     | 25 したふにやこゑもおしまぬ百千鳥  | 承 知     |
| 13 むら草のかれふ色そふ若みどり   | 紹 巴     | 26 やどりわかるゝしのゝめの空    | 元 理     |
|                     |         | 27 影は月露よりなれし霜ふりて    | 宗 粮     |
|                     |         | 28 色もこずゑの秋のした風      | 玄 哉     |

- 29 岡の辺やをじかたゝずむ暮ふかみ 玄札
- 30 又たれならしかへるひとむら 恕哲
- 31 わたし舟さし行あとに袖みえて 紹巴
- 32 入日や雲間しぐれきにけり 承知
- 33 かげさむきひゞきや松にのこるらむ 恕哲
- 34 道は木葉にあらはなる里 宗艱
- 35 さびしさはおく山ずみのひとりにて 元理
- 36 たのむかたやはけふごとのつて 玄哉〔二才〕
- 37 書をくやふみもうらみもつもるらん 承知
- 38 いさめてもはたあだめける人 底閑
- 39 おもふには親ある中もたへかねて 宗艱
- 40 墨をこゝろにかふる衣手 紹巴
- 41 かへる雁風をすがたにうち霞 歳長
- 42 かぎりもなみのはるの海ばら 元理
- 43 花をゝきて難波わたりの夕ながめ 玄哉
- 44 とを里を野はま萩散ころ 宗艱
- 45 うす霧のいさよふ月はあり明に 玄札
- 46 ふかしならせばあきのすゞしさ 恕哲
- 47 ことさらにしらぶる風のをとそへて 紹巴
- 48 あひみるほどのたよりをぞ聞 底閑
- 49 世にしらぬ人もいひなす面影に 宗艱
- 50 はつもとゆひをちぎるゆくすゑ 恕哲〔二才〕
- 51 かはらじといはふに老をたのしみて 元理
- 52 夢のまがひにこえし一とせ 玄哉
- 53 のこりても花より後は春もなし 承知
- 54 深谷の霧にうぐひすの声 紹巴
- 55 山は月ひかりわく夜の明初て 恕哲
- 56 なぎさ玉よる秋のうらなみ 宗艱
- 57 露ながらみだるゝあしのしたおれに 底閑
- 58 朝けしづけく舟いだす人 歳長
- 59 さえぐし跡もあらしの雲消て 宗艱
- 60 やどりやいづこ鳥なきて行 玄札
- 61 はるかなる山かたつきてくるゝ野に 紹巴
- 62 薨木ぶかきまへのかけはし 宗艱
- 63 庭もせやうへてまつまに茂るらん 元理
- 64 くべきはいつのたのみはかなき 底閑〔三才〕

- 65 たがならぬ心のうらのうらなれて 宗 稜
- 66 かゝるすまゐもうきすまの波 紹 巴
- 67 旅枕あかしわびたるさ夜風に 玄 札
- 68 夢もむすばぬ月のあはれさ 元 理
- 69 むかしおもふ友とやなれる秋ならん 底 閑
- 70 宿はよもぎが松むしの声 恕 哲
- 71 霜しろきみちのかたはら跡絶て 玄 哉
- 72 冬川を舟つなぎすてけり 宗 稜
- 73 すゞしきやあまりなるまで暮ぬらん 承 知
- 74 山のしづくぞ袖にうちゝる 玄 札
- 75 うきなみだわすれはてゝの隠家に 元 理
- 76 みえてしばしの夢やなになる 歳 長
- 77 よこ雲の空やわかれをさそふらん 紹 巴
- 78 くはゝるもげにあやにくの春 恕 哲「(三ウ)
- 79 なみくゝのめしに入べきあがたかは 宗 稜
- 80 のこるみちとや青柳のかげ 元 理
- 81 雪とのみ深山の花にわけてきて 恕 哲
- 82 いはほにかゝる水のしら波 底 閑
- 83 はるかにもながす榊のいかならん 歳 長
- 84 夕をしらぬ五月雨の比 紹 巴
- 85 はらひつゝよるのまゝなる蚊の声に 玄 哉
- 86 閨のあつさぞ秋としもなき 宗 稜
- 87 玉だれのこすにたち出月まちて 紹 巴
- 88 露をあやめは袖いかにせむ 玄 哉
- 89 うつり香はふるされきてのから衣 宗 稜
- 90 をちかた人ぞひゞに恋しき 恕 哲
- 91 越にけむあとをながめの峯の雲 玄 札
- 92 春よ秋よとなれしかづらき 承 知「(名才)
- 93 明ぼのにこゝろかくれば夕まぐれ 元 理
- 94 ひゞきもとをき入あひのかね 歳 長
- 95 きよむるもはやしがくれは神さびて 恕 哲
- 96 苔地しづかにうそぶくやたれ 承 知
- 97 そことなくうち任ゆく馬のうへ 紹 巴
- 98 雪のあしたの野こそひろけれ 玄 哉
- 99 沢水のすゑはあまたのうす煙 宗 稜
- 100 さとは田の面につゞく一かた 玄 札

宗叢十七	玄哉 十	底閑 九
歳長 八	玄札 九	元理十一
恕哲十三	一千代一	承知 九
紹巴十三		「(名ウ)

【解題】

二曲一隻の屏風に仕立てられた本作品については、従来全く未紹介というのではなく、京都女子大学元教授・故浜千代清氏によって、『京都女子大学通信』第二十九号(京都女子大学広報委員会、昭和六十二年五月二十日発行)の中で、『連歌屏風』京都女子大学図書館蔵」と題し、全体写真と部分写真も添え、「新出資料」として紹介されている。すなわち、既に二十年近く前に紹介されたものということになるのだが、学内広報誌上での紹介であるうえ、屏風という形態のため他の連歌資料とは異なる位置に保管されてきたこともあつて、その存在が広く知られることはなかったようで、今でもほとんど新出資料と言つてもいいかもしれない。宗養を中心とした連衆による作品だが、斎藤義光「連歌師宗牧・宗養作品年譜考」(『大妻女子大学文学部紀要』第二十号、昭和63)や、さらには『連歌総目録』にも言及されていない。

右の浜千代氏の紹介は、学外には流布していない広報誌に掲載されていて、また、同氏の論文集などにも採録されておらず、今もなお学外者の目には触れにくいものかと思われる。よつて、まずは次にその全文を掲げておく。

連歌一巻の懐紙を屏風に仕立てたものは、他に例を見ない。高さ72cm、巾94cmの二つ折り。懐紙4枚を切り離して、上段右から左へ初折(しよおり)表・裏、二ノ折表、中段同裏、三ノ折表、下段同裏、名残ノ折表・裏と貼る。この連歌は天文23年(1554)4月2日興行の「賦何人(ふすなにひと)連歌」。当時第一の連歌師宗養、次代を担うこ

とになる紹巴（じょうは）等10人が作者で、発句（ほつく）「風や花ふけば散くる夏木立 宗養」は、『発句帳』夏の部「余花」に収められているものの、一巻全体としては新出資料である。

これを屏風に仕立てたのは近世末と見られることがまた興味深い。連歌は中世に大流行し、江戸時代になると祈禱連歌などにその形骸を留めるのみというのが通説だが、よく調べてみるとなかなかどうして、文化・文政期は連歌復興期とっていいほど、連歌への関心が高まっているのである。この屏風もそうした時代の雰囲気を与えているようである。おそらく連歌を楽しむ人たちが膝をそろえて見入ったことであろう。

福岡県行橋市の今井祇園社の奉納連歌は450年余の歴史をもって現在に及んでいる。また今年5月5日には大阪市平野区の杭全（くまた）神社連歌所で、明治以来絶えていた平野連歌が再興される。そういうことについても、この連歌屏風が本学図書館に収められたことをありがたく思う次第である。（原横書き）

右紹介の通り、初折から名残ノ折までの四枚の百韻連歌懐紙を各々表と裏に切断したものを、上・中・下段に亘って右から左へ、それぞれ三・二・三紙貼っている。各紙は、金銀泥下絵入、縦一七・三×横五二・七く五三・〇糰で、下絵の絵柄は、「初才」時鳥・草木・雨「初ウ」杜若「二才」柳・燕「二ウ」藤「三才」萩「三ウ」薄「名才」梅「名ウ」笹・鳥。

展観の際には見落としていたことだが、右紹介の傍線部には問題がある。傍線部が、上段の左の一紙を二ノ折表、中段右の一紙を二ノ折裏とし、中段左の一紙を三ノ折表、下段右の一紙を三ノ折裏と見るが、それぞれ逆であって、全体として、各々右から左へ、上段は、初折表↓同裏↓二ノ折裏、中段は、二ノ折表↓三ノ折裏、下段は、三ノ折表↓名残ノ折表↓名残ノ折裏と、貼られているものと捉えるべきである。二ノ折と三ノ折がそれぞれ、誤って表裏逆の順序に貼られていると考えられる。先に掲げた【翻刻】では、本来の正しい順序に直して翻刻している。右紹介の傍線部に問題があり、本

来の順序が上述のようであると推定される理由は、次の通り。

上段右や、中段左、下段右、下段中の各紙には、右から左へ順にほぼ等間隔（六く七纏間隔）に、同じ高さの位置に、対応する形状の虫損が、見られる。また、各紙の左右の端に糊付けの跡らしきものが見られる場合もある。それらのことは、本作品が、屏風に貼られる以前に、卷子本に仕立てられていたことを示していよう。そして、中段左の一紙の下端に、右端から中程にかけて段々と小さくなるほぼ等間隔の虫損が見られ、それと対応して、下段右の一紙の下端に、中程から左端へと段々と大きくなるほぼ等間隔の虫損が見られる。また、同じく中段左の一紙の上方には、中程から左端へと段々と大きくなるほぼ等間隔の虫損が見られ、それと対応して、下段中の一紙の同じ高さに、右端から左端に亘って段々と小さくなるほぼ等間隔の虫損が見られる。これらのことは、本作品が少なくとも卷子本の段階では、浜千代氏の右紹介の傍線部に言うように、中段左の一紙から下段右の一紙へ、さらに下段中の一紙へと継がれていたのではなくて、下段右↓中段左↓下段中という順序で各紙が継がれていたことを、意味していよう。卷子本が屏風に仕立てられる過程のどこかで、順序が誤られたのではないか。

こうしたことを考えていた時に、長谷川氏から式目上の問題について、次の如く御教示頂いた。右紹介の傍線部の通りであるとすれば、先の【翻刻】の37く50が二ノ折表で、初折裏の9く22に続くことになるが、その場合、恋は七句去と規定されているのに、20の恋の句と37の恋の句が二句しか隔たらないことになる。同様に、右紹介傍線部では、65く78の後に51く64が続くことになるが、その場合は、春は三句以上続けるのが規定だが、78の一句で春を捨てたことになり（続く51は春句でない）、また、四季は七句去と規定されているが、78の春と52の春が一句しか隔たっていないことになる。さらに、51く64の後に79く92が続くことになる、63の夏と84の夏が六句しか隔たっていないことになる。一方、22・50の付句は、浜千代氏の右紹介では各々37・23ということになるが、内容上23・51の方が相応しいし、また、36・64の恋から各々

37・65の恋へとつながる。あるいは、78の春は以降最低二句は続くと考えられるが、その点から見て、その付句としては79が相応しく、内容的にも両句よく付いている。以上のことなどから、上段右↓上段中の後には、上段左でなくて中段右が続き、その後上段左を経て、下段右↓中段左↓下段中そして下段左へと、各紙がつながるものと推定される。

この式目上からの推定と先の虫損からの推定は、まさに合致するところであって、その推定の確かさを互いに保証し合うだろう。結果、浜千代氏の紹介の傍線部には問題があり、先の【翻刻】に示したのが、本作品の正しい順序であると結論付けた次第である。なお、さらに言えば、中段右と中段左の各一紙の右端に、判然とはしないが、各紙の順序を示すものらしい「三」「六」という数字が記されているように見えることも、上の結論を支持することになる。

貼付された百韻の連衆と句数を、句上に従って挙げれば、次の通り。

宗艱十七、歳長八、恕哲十三、紹巴十三、底閑九、元理十一、承知九、玄哉十、玄札九、一千代一  
「当時第一の連歌師宗養、次代を担うことになる紹巴等十人」（浜千代氏紹介）である。

(中前)

昌叱老連歌懷紙(911・2)

【翻刻】

賦何路連歌

- |                   |    |                    |    |
|-------------------|----|--------------------|----|
| 1 雪おれやこゝろの杓のしたすゞみ | 昌叱 | 4 かへる跡にもうかぶ江の舟     | 文閑 |
| 2 時雨行かとせみのなく山     | 似生 | 5 さとやたゞ芦まはるかにつゞくらん | 正允 |
| 3 かげうすき夕日は雲のかた分て  | 紹巴 | 6 一すぢしるしあらを田のみち    | 永純 |
|                   |    | 7 夜なくくの月にをじかの声たてゝ  | 賢家 |

- 8 みぎりにちかき野べの秋かぜ 玄仍〔初才〕
- 9 竹の葉の露もこぼるゝ暮ふかみ 覚全
- 10 たびくめぐるむら雨のをと 友益
- 11 かたぐにかきねの水やながるらむ 焉而
- 12 かれにし草もあをみゆく色 一千世
- 13 木のまもるひかりしづけき朝なく 似生
- 14 やどりいでつゝとりやなくらん 昌叱
- 15 やすらひし人はかへれる山がくれ 永純
- 16 よをすつる身やうらやみてとふ 紹巴
- 17 月もたゞこゝろすめるをながめて 文閑
- 18 空にねぎめやさそふかりがね 正允
- 19 あけぬよりいそぐは露の草まくら 玄仍
- 20 うちつれぬるもさきだてる袖 賢家
- 21 ちるかげをみしとやおもふ花の友 友益
- 22 こてふとびさる風のゆくすゑ 焉而〔初ウ〕
- 23 霞こそへだてあまたの籬なれ 昌叱
- 24 夕さびしき山まどのうち 覚全
- 25 絶やらぬ時雨のをとのいたびさし 紹巴
- 26 むすぶともなき夢のあはれさ 似生
- 27 そむきつゝたち別るゝを月もしれ 正允
- 28 身にしめてうきことのはのすゑ 文閑
- 29 いつのまに秋となりぬる中ならん 賢家
- 30 茂りにまじる花のくさむら 永純
- 31 夏の日のあつさのほどをしをぎゝて 焉而
- 32 すみかにとをき谷のした水 玄仍
- 33 入つゝもおこなふかたの山ふかみ 友益
- 34 かしこきちかひおもふをはつせ 昌叱
- 35 かへりてもたよりはあらぬ都にて 覚全
- 36 うちむかひしはあだの夢人 紹巴〔二才〕
- 37 かた見ぞとみるにつらさのます鏡 文閑
- 38 なぐさめがたきこゝろいつまで 正允
- 39 我よはひわか木の花をまちやせん 昌叱
- 40 うつしかへたるそのゝ梅が枝 友益
- 41 いづくとかうぐひすの巢をたづねまし 永純
- 42 春にきかばやなくほとゝぎす 似生
- 43 山のはのおぼる月夜にこす巻て 紹巴

- 44 いねがてなれやかたしきの袖 覚全
- 45 またじとはおもふ物からわすれかね 玄仍
- 46 なげのなきけもたゞならぬのみ 賢家
- 47 うき事はさらにわが身のこゝろにて 焉而
- 48 のがれぬつみはくふるともなし 昌叱
- 49 前の世をあらはしつゝも生れいで 正允
- 50 人のかたちぞわきて稀なる 文閑〔二ウ〕
- 51 ふりそふるみちかひはみなあまつゝみ 永純
- 52 跡にながれの井せきはるけし 紹巴
- 53 吹たゆむひまもあらしのむら紅葉 覚全
- 54 やまよりあきやくれなむとする 焉而
- 55 月もやゝとくなりぬる影さびし 似生
- 56 夜さむのとぼそさしこもりつゝ 正允
- 57 おもふをば旅にひとりのとこのうへ 昌叱
- 58 やどるあかしのちぎりしるしも 玄仍
- 59 かりそめに聞だにわびしうらのなみ 友益
- 60 友なし千どりいづちなき行 文閑
- 61 はるゝかとみるより雪の中空に 賢家
- 62 いこまのやまはくものをちかた 昌叱
- 63 明ぼのやたつたの花の色ならん 紹巴
- 64 なびく柳のかげぞ木ぶかき 永純〔三才〕
- 65 露やまだ名残なりけむ春の雨 正允
- 66 かすみのうちのかりはぶく声 似生
- 67 苗代のあさきみぎはゝみどりにて 玄仍
- 68 野沢よりまつ草たかきすゑ 紹巴
- 69 さとはなをそことしもなき通路に 焉而
- 70 あはれころもやうちもおどろく 賢家
- 71 秋来ぬとねぬるまくらに風ふれて 昌叱
- 72 きりまそひ行月のすがしさ 覚全
- 73 星あひのゆふべいかにとおもひやり 永純
- 74 しらぶるもたゞことさらの声 友益
- 75 よもぎふもさすがたへぬるすま居にて 文閑
- 76 しばしうき身のきえをまつほど 正允
- 77 たのめをく行ゑやおなじわたり川 紹巴
- 78 いひかはせしもいはけなき時 玄仍〔三ウ〕
- 79 とりみるもふりたる文はおぼつかな 覚全



箱入。箱書「昌叱老連歌懷紙 一卷」。黄土色絹表紙の縦一七・九×横一五・六糎。見返しは、金銀箔散らし。料紙は、金銀下絵鳥の子、各紙四九・八〇五四・〇糎で、下絵の絵柄は、「初才」杉・山・雲「初ウ」菖蒲・水辺鳥「二才」松・蒲公英「二ウ」桜・鳥「三才」薄・草花「三ウ」萩・蝶「名才」水仙「名ウ」柳・笹。「證札」と書いた包紙の中に極札あり、表に「連哥師昌叱（雪おれや／有名一卷）」**印**（方形陽刻黒印、川勝宗久）、裏に「下絵有巻物 壬辰二 **川宗**（長方形陽刻黒印、川勝宗久）」。

『連歌総目録』に記載のない、新出の百韻。ただ、昌叱による発句「雪おれやこころの枚のしたすゞみ」は、『発句帳』の夏部「納涼」に記載されている（湯之上早苗『発句帳資料と研究』桜楓社、昭和60、三九六一）。

本百韻の連衆と句数を、句上に従って挙げれば次のようになる。

昌叱十二、似生八、紹巴十二、文閑九、正允九、永純九、賢家八、玄仍九、覚全七、友益八、焉而八、一千代一

発句の作者の昌叱は、父昌休と十四歳で死別して以降、紹巴のもとで修行し成長したらしい。両者が同座した作品が多く伝わっており、本作品も、そうした事例の一つということになる。玄仍は、紹巴の長男、里村北家の祖で、昌叱の女を妻としており、子に玄陳・玄的がいる。

連衆のうち焉而は、『連歌総目録』に記載された作品の中では、天正十七年（一五八九）五月二十四日の「何人百韻」にのみ出句しており、同百韻の連衆十四人、

紹巴、広堯、昌叱、文閑、正允、玄仍、賢家、正繁、長俊、覚全、寿忍、焉而、元伝、千代寿

のうち八人（傍線部）までが、右百韻の連衆と共通している。興行年についての記事が見られず成立時期は不明であるが、およそこの「何人百韻」の前後の頃の成立と見ておいてよからう。

その他、連衆のうち、似生は、天正十年（一五八二）二月十八日の源氏物語竟宴連歌「山河百韻」の句上に、「前田景三

郎」(大阪天満宮蔵二本)「前田景次郎」(内閣文庫本)と注記されている(『連歌総目録』)。文閑は、『顕伝明名録』(日本古典全集)巻七に「四條道場連歌師 紹巴時代」。元龜二年(一五七二)二月五〜七日の細川藤孝興行「大原千句」の連衆に名を連ねているのが、早い出句例で、同千句の大阪天満宮蔵本も、「文閑」について「四條道場」と注記する(『連歌総目録』)。天正六年(一五七八)五月十八〜二十日の「羽柴千句」では、紹巴・昌叱らと共に出句している。正允には、天正九年(一五八一)八月十三日の独吟「正允千句」がある。賢家は、天正三年(一五七五)三月八日「何船百韻」に「山崎」と注記される(『連歌総目録』)。『顕伝明名録』巻四に「江州山崎。源太左衛門。佐々木侍」と記される「賢家」と同人か。友益は、『顕伝明名録』巻八に「近衛家。速水左衛門佐。号北小路」。

(中前)

付記 貴重図書翻刻の御許可を賜りました京都女子大学図書館に対しまして、厚く御礼申し上げます。また、展覧も含めて、大変お世話になりました、図書課課長細谷敏雄氏・同係長亀塚修氏を始めとする図書館員の皆様に、心より御礼申し上げます。

(本学非常勤講師・日本学術振興会特別研究員)

(本学教授)